

膨れあがる政府債務

内外の金融関係者の話を聞いていると、2010年はソプリンの年になりそうだという。ソプリンとは金融業界の用語で、国債や地方債など、政府が発行する債券のことである。

今年がソプリンの年になるという意味は、多くの国で財政のほころびが顕在化し、国債や公債市場で価格暴落が起きるリスクがあるということ意味だ。国債や公債の規模が大きいだけに、金融市場にとってこれは大変なことである。

昨年の後半から、こつした動きはすでに見え始めている。当面大きな注目を浴びているのは、ギリシャ、イタリア、スペインなど欧州の国である。いずれも深刻な財政危機に陥っている。財政破綻の可能性がささやかれているギリシャの大臣は、欧米の新聞にしばしば写真が出ているような状況だ。

なぜ、2010年がソプリンの年になるのか。その大きな理由は、世

界的な金融危機への対応から多くの国の政府が積極的な景気てこ入れ策を行い、それが財政状況を悪化させているからだ。金融危機の最悪の状況は抜け出したものの、財政資金を出し切って、政府の債務が膨れあがってしまったのだ。

欧州の国の債務問題だけなら、対岸の火事ぐらいに考えられそうだ。

日米のソプリンリスク

しかし、ひょっとしたらソプリン

リスクの本命は日本と米國かもしれない。日本の政府債務の状況についてはいまさら言うまでもないだろう。対GDP比で見れば政府債務の額はおよそ170%前後で、シンパフェ

について世界第2位であるという。日本に続いて、レバノン、ジャマイカ、イタリア、スーダンと続くが、

ここまでは債務の対GDP比が100%以上で、世界のその他の国はすべて100%以下である。数字の上では日本の国と地方政府の債務は深

刻な状況であるのだ。

ソプリンリスクが顕在化したら、経済は大変なことになる。国債や地方債の価格が暴落するというのは、その利回りが高くなるということだ。国債や地方債に大量の資金を投じている金融機関は大きな損失を被るようになる。金利が上がれば、借金を多く抱えている家計や中小企業も大変だろう。そして、国や地方政府も借金に対する利回りが上がれば、それだけ利払いにお金が必要となってしまう。つまり財政が回らな

くになってしまう。

こつした事態は絶対に避けなければいけない。しかし、現実には国や地方の政府がやっていることは、財政破綻に向かってひたすら走り続けているようにしか見えない。4年間増税はせつたいたいしなと明言して、信頼のおける財政再建シナリオが書けるはずはない。

財政健全化へ行動を

経済学者は10年以上、財政破綻のリスクを叫び続けてきた。しかし、

いついかに財政破綻は起きない。だから「オオカミ少年」と呼ばれることがある。オオカミが来ると嘘をついて誰にも信用されなくなった少年の話だ。しかしよく考えてほしい。

オオカミ少年の話でも最後にはオオカミが来た。このままいったら財政破綻は必ず起きてしまうのだ。そうなるからでは遅い。

ところで、日本と同じようにソプリンリスクを抱えているのが米國である。金融危機に直面して、オバマ政権は未曾有とも言える経済対策を行ってきた。これは必要なことではあったが、その結果、財政状況が急速に悪化しているのだ。今後の財政運営いかんによっては、米國でもソプリンリスクが高まる可能性がある。

もっとも、ソプリンリスクはまだリスクの段階にすぎない。国や地方政府がしっかりと財政健全化を進めていけば、まったく問題は無い。2010年はソプリンリスクの年というよりは、政府の賢明な行動が求められる年だと言ってしまう。

(総合研究開発機構 理事長・東大教授)